

< 国内情勢 >

「フランスの植民地、ベトナムを解放した帝国陸軍将兵」

井川一久さんから聞いた話

(前編)

藤井巖喜 (国際政治学者)

大東亜戦争の目的は3つあった。第1は自存自衛(独立自尊)であり、第2はアジア植民地の欧米列強からの解放であり、第3が共産主義の侵略を防ぐことであつた。1943年(昭和18年)11月5日から6日に東京で開催された大東亜会議は、独立自尊のアジア諸国の平等・互惠・連帯を世界に宣言した、有色人種諸国による初の国際首脳会談(サミット)であつた。

大東亜戦争を通じて日本がインド・インドネシア・マレーシア・ビルマ(ミャンマー)の独立に貢献した事績は比較的よく知られている。

インドの解放に関しては、日本はチャンドラ・ボースと連帯し、大英帝国の植民地主義を打倒しようとして尽力した。チャンドラ・ボースは大東亜会議にもオブザーバーとして出席している。日本は当時、日本軍が占領していたアンダマン諸島とニコバル諸島をチャンドラ・ボースの仮政府(亡命政権)に与えた。

そして、インパール作戦によって一挙に首都デリーを解放しようとしたが、力尽きて敗退している。しかしながらインパール作戦は、インド独立戦争においては決定的な重要性をもつ軍事作戦であつた。

一方、藤原岩市率いるF機関によるインド独立支援の活動も比較的よく知られている。大東亜戦争中にビルマは独立し、バー・モー首相は独立ビルマ国の首脳として大東亜会議に出席している。インドネシアでは敗戦後、約2,000名の日本人将兵が残留し、インドネシアの対イギリス・対オランダの独立戦争に参加した。このうち、約1,000名が独立戦争に命を捧げたと言われている。

このことを最もよく象徴するのが、防衛省敷地内に立つ**インドネシア国軍初代司令官スディルマン将軍の銅像**である。この**スディルマン将軍像**はインドネシア国防相によって日本政府に寄贈されたものである。

スディルマン将軍は、日本が育成した**独立義勇軍**（PETA）の優れた一員であり、4年間にわたる独立戦争を指導し、祖国の独立を確かめた後、他界している。オランダ 350 年の植民地支配に終止符をうったインドネシアの独立戦争に、日本は大いに寄与したのである。これらの事績に比較し、ベトナムの例はあまり知られてこなかった。

それはベトナムがフランスとの独立戦争を勝ち抜いた後、直ちに共産主義陣営の一国となってしまった為に、インドネシアやビルマ、またインドのように日本との関係が見えにくくなってしまった為である。

筆者は**呉竹会の機関紙「青年運動」**（令和 3 年 5 月 23 日号）に掲載する為に、4 月 19 日に 2 名の専門家をお呼びして、対談をしていただいた。

一人は**池田憲彦・拓殖大学元教授**であり、もう 1 名が**井川一久**さんで、朝日新聞サイゴン支局長・ハノイ支局長・朝日ジャーナル副編集長を務めた方である。実は**井川さん**の方から、**池田教授**と現在進行形の**アジア情勢**について対談をしたいという依頼があり、それを受けての対談の実現となった。場所は東京お茶の水の山の上ホテルであった。

対談内容は多岐に及んだが、当日、**井川さん**から聞いた**ベトナム独立戦争での旧日本軍の貢献**という話をここで要約して取り上げてみたい。

クアンガイ陸軍士官学校の創立

日本軍将兵のベトナム独立戦争への貢献は、今まで殆ど知られることがなかった。ベトナム戦争取材を通じてベトナム専門家となった**井川さん**は、この日本軍将兵の功績について、実地で調査をされ、その成果を発表されている。

以下に書くことは、対談で語られた**井川さんのご存知の歴史のごく一部**である。大東亜戦争敗戦前の話から書き起こしたい。そもそも大東亜戦争中においては、日本は決してベトナムのフランスからの独立に積極的に動いていたわけではない。それには以下のような理由があった。

当時、**植民地宗主国のフランスは、ナチスドイツによって占領**されていた。

その為、**ペタン将軍を首班とする政権**が首都パリではなく、ヴィシーに置かれ、これがドイツの占領政策に協力していた。

ペタン将軍は第一次世界大戦の英雄ではあったが、この屈辱的な役割を受けざるを得ない立場にあった。**ペタン将軍**も決して積極的なナチス協力者であったわけではなく、彼の行動も、被占領下にあるフランスの愛国者の勇気と忍耐に基づいている。フランス解放後、**ペタン将軍は死刑を宣告されたが、ドゴール将軍らの配慮によって、恩赦を受けている。**

戦争中、ベトナムは形式的には、日本の同盟国ナチスドイツに従順な**ヴィシー政権の統治下**にあった。この為、日本は敢えて、ベトナムのフランスに対する独立戦争を支援しなかったのである。イギリスの植民地であるインド・ビルマや、オランダの植民地であるインドネシアへの独立支援とは全く異なった対応を日本はとったことになる。このことを偽善的と批判する向きもあるが、戦争中のリアリズムからすれば当然の日本政府の行動であった。

注目すべきは敗戦後に起こった出来事である。**大東亜戦争の敗戦後、600人から650人の日本軍将兵がベトナムに残留**した。そしてベトナム人の反フランス独立闘争に身を投じたのである。ベトナム中部海岸にクアングイという町がある。そこにベトナム初の本格的な陸軍士官学校が設立されたのは、1946年6月1日のことであった。ここの**教官は全て旧日本陸軍の軍人**であった。

指導したのは尉官クラスが中心である。思えばインドネシア独立戦争に身を投じた将兵の中心も尉官クラスであった。この学校は正確には陸軍中学と呼ばれたが、事実上の士官学校である。

当時、ベトナムにはベトミンという組織があった。これはホーチミンを中心とする「**ベトナム独立同盟**」の意である。ベトミンは全国の組織を通じて、青少年400人を選抜し、それを100人ずつの大隊に組織した。大隊のそれぞれに正副の教官1名をつけて、旧日本帝国陸軍風の軍事教育をそのままにベトナムの青少年に施したのである。旧日本陸軍の歩兵操典などを用いて、一貫した軍隊教育を行なった。**校長はグエン・ソン将軍。**

グエン・ソン将軍は有名なボー・グエン・ザップ将軍と並んで、勇名をはせたベトナム独立戦争の英雄である。そのもとで実際に教鞭をとった教官4名、副教官4名ならびに医務官の9名は全て旧日本陸軍軍人であった。

詳しい陣容は以下の通りである。

第一大隊

教官 = 谷本喜久男・旧陸軍少尉
副教官 = 青山浩・旧陸軍軍曹

第二大隊

教官 = 中原光信・旧陸軍少尉
副教官 = 大西某（詳細不詳）

第三大隊

教官 = 猪狩和正・旧陸軍中尉
副教官 = 柳沢利伝治・旧陸軍上等兵

第四大隊

教官 = 加茂徳治・旧陸軍中尉
副教官 = 峰岸貞意・旧陸軍兵長

医務官 = ベトナム名 レ・チュン（本名その他、詳細不明）

この陸軍士官学校で、若きベトナムのエリートは全くの旧日本陸軍風の軍隊教育を受けたのである。重要な点はそれが、愛国心教育を含むという点である。若きベトナムのエリートは、旧日本陸軍の軍人たちから親兄弟も及ばぬほどの親身の指導を受け、日本人教官は自らの手で果たし得なかったアジア植民地解放の偉業を若きベトナム人たちに託したのである。

そのベトナム人達が第1次インドシナ戦争と呼ばれる対フランス独立戦争を戦い抜き、第2次インドネシア戦争といわれる所謂「ベトナム戦争」を戦い抜き、そして第3次インドネシア戦争と呼ばれる中越戦争をも戦い抜いたのである。彼らが世界最強のアメリカ軍と戦って屈しなかったというのは歴史的事実である。しかしそのベトナム独立戦争を戦い抜いた人々の強靱さの根底に、旧日本軍の軍事教育が存在したのである。ベトナム兵の対米戦における勇敢さの根源は、日本兵が大東亜戦争で見せた特攻や玉砕の愛国心と結びついていたのだ。当然のことながら、クアンガイ陸軍士官学校で教官となった人々は、最早、一人もこの世に存在していない。そしてクアンガイ陸軍士官学校の存在自身も、歴史の混沌たる潮流の中で埋もれてゆこうとしている。

大東亜宣言にも関わらず戦争中においては、大日本帝国はベトナムのフランス植民地からの解放という大義に貢献することは出来なかった。しかし敗戦後、確かにベトナムに残留し、独立戦争に身を投じた日本軍将兵は大東亜宣言の精神を具現し、東亜解放の戦役を戦い抜いたのである。ベトナムの対米戦争の根底に、大日本帝国の軍人の愛国心と戦略・戦術は確かに生かされていたので

ある。特に1950年の朝鮮戦争の開始、また1953年から54年のディエンビエンフーの戦いまでは、戦争における旧日本軍将兵の貢献は顕著であったと言われている。1950年の朝鮮戦争以降は、ソ連共産党ならびに中国共産党によるベトナム支援が増大し彼らの影響力も強くなるが、そこに至るまでの独立戦争指導においては、旧日本軍人の貢献は群を抜いていた。

この意味で大東亜戦争の理想は、日本敗戦と共に雲散霧消したわけではなかった。大東亜戦争を通じて日本が蒔いた独立自尊の種は、戦後確かに開花し、それがASEANとして結実し、また米ソ中などの大国と一定の距離を保った東南アジアの経済的繁栄の基礎ともなった。インド・インドネシア・タイ・ビルマ等の独立に日本が貢献したことは事実であり、保守系の日本人においては比較的よく知れ渡った事実である。しかし歴史教科書などにおいては取り上げられてはおらず、国民の常識となるまでには至っていない。まことに残念なことだ。

しかしベトナムとの関係となると、今まで全く顧みられることはなかった。

井川さんが忘れ去られようとしている歴史を発掘されたことの意義は誠に大きい。大東亜戦争の大義は、ベトナムにも浸透していたのである。問題は東亜会議で打ち出した美辞麗句にあるのではない。大事なことは日本軍将兵がその理想の実現のために、自らの身命を賭して戦ったという事実である。

この事実こそ回復し、我々の精神的伝統を養うものとしなければならない。

日本は決して、アジアを侵略したのではなかったという事実を、我々自身が銘記すると共に、子孫にも教育してゆかなければならない。